
希少保護生物指定女子。

葉名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希少保護生物指定女子。

【Nコード】

N0980Z

【作者名】

葉名

【あらすじ】

……おかしなことになりました。翌日のテスト勉強に飽きて世界史の教科書を枕に居眠りした女子高生・夏妃は、目覚めると見知らぬ森の中にいた。そこで出会ったのは森のクマさんではなく、大きな図体のドラゴンさん。黒髪イコール黒龍のお子様と勘違いされ、自分は人間だと訴えるも、「ニンゲンとはなんだ？」と不思議がられる始末。どうやら目覚めた場所は人間の存在しない世界であるらしかった。この世にたった一人のヒト科女子、希少生物に指定され、ドラゴン（龍）に保護されています。

1（前書き）

初登校です。いや投稿です。

拙く、文章にお見苦しいところもあるかと思っています。気になるころがあればご指摘いただければありがたいです。

それでは、サバサバ異世界ライフ目指して、行けるところまで行ってみます。

寝起きの耳に届く小鳥のさえずり。梢を揺らす風の音。

こんな「THE・爽やかな朝」とタイトルが付きそうな目覚めは、15年の人生で初めてだ。

とはいえ、あんまり気分はよくない。柔らかいといっても土の上に寝そべっていたので全身がちがだし、髪の毛にも土や落ち葉がくっついていて。どちらかといえば不快だ。

やれやれと体を起こして背中やら髪やらを払う。頭上を仰ぐと、枝葉の間からまだ弱々しい陽の光が差し込んでいた。

さて、と夏妃はこ^{なつき}こでようやく現状を確認する気になった。

そのいち。着ているものは部屋着代わりのくたびれたTシャツとジャージ。これは記憶にある通りだ。風呂上りに着て、部屋に戻ったそのときのまま。

そのに。たった今まで自分の頭があつた位置に、付箋を貼られた本があつた。サイズはA5版。それなりの厚さで、枕にちょうどいい。タイトルは、『新版世界史B』。これも覚えている。明日が高校に入って最初の定期試験で、その初戦が世界史なのだ。いや、もう「今日」だろうか。とにかく、夏妃は徹夜でその追い込みをしていた。

そのさん。周りを見回してみる。濃い緑色をした広葉樹が生い茂り、下草も勢いよく繁茂している様子はまさに初夏の森の中、といった様子だ。しかし、こんな場所には覚えがない。夏妃は自分の家の、自分の部屋にいたはずなのに、一体何がどうなってこんな場所

にいるのか。

来ている服と世界史の教科書のほかは自分の持ち物らしいものが見当たらず、靴さえ履いていない。まあ、部屋の中にいたのだから当たり前だけれど。とりあえず教科書を拾い上げて付いた汚れをばたばたと払った。それをなんとなく胸に抱えて、考え込む。

さて、これからどうすべきか。

この森が深いのか、それとも人里に近いのかもわからない。迷子になったときの基本といえば「その場から動かないこと」だけれど、夏妃を迎えにくる人物などいるのかどうかの問題だ。そもそも誰が何の目的で、こんな真似をしたのか。

頭に巢食う嫌な想像を追い出すべく、すーはーと大きく息を吸って吐いてみる。できるだけゆっくりと、吸うよりも吐く時間を長く。気持ちを切り替えるときに有効だと、何かの折に教師が言っていた方法だ。気休めみたいなものにもすがりたい心境だった。

ばくばくいつていた心臓が落ち着きを取り戻してきたところで、とにかくこの最初の場所を見失わない程度に森を探ってみよう、と決めた。じっとしていても怖い想像が膨らむばかりで良いことがない。迷ったら行け、が夏妃の信条である。

しかし。

自分を奮い立たせて腰を浮かせたその時、地響きが聞こえてきた。地震？と動きを止めたが、確実に大きくなるそれは規則的で、何か意志を持ったもののようには思えた。例えばそう、SF映画で怪獣が歩く音がこんな感じではなかったか。

——ある日、森の中。

ふと、童謡のメロディが頭に浮かんだ。緊張感のなさに自分で呆れたが、もしかしたら防衛本能なのかもしれない。逃げようという気にもなれず、中途半端な姿勢のまま音のする方向をじっと見つめる。さつきせつかく収めた動悸がまた耳についた。

やがて、視線の先の木立から小鳥が一斉に飛び立つ。甲高く鳴き交わす声と木が軋む悲鳴のような音とともに、森の奥から現れたのは。

どの樹木より高い背丈。眼光鋭い大きな眼。鹿に似た銀の角は美しく、体を覆う翡翠色の鱗とともに朝日をはじいて光る。

夏妃は、我が目を疑いながらぽかんと口を開けた。

途方もなく巨大なその姿は、残念ながら【森のくまさん】ではなく。

「森色のドラゴンさん……？」

目覚めた見知らぬ森の中。夏妃が初めて発したのは、そんな気の抜けた台詞だった。

呟くような声だったはずだがよほど聴覚が鋭敏なのか、ドラゴン
はぴくりと片耳を動かし、確実に夏妃を見つけた。

夏妃のこぶしより大きいであろう眼に捉えられてさすがに危機感
を覚える。

ドラゴンはぱしぱしと瞬きすると、さらに夏妃のほうへ近づいて
きた。騒々しく音を立てて折れる枝葉の様子が不安を煽った。

幸い危惧したように踏みつぶされることなく、代わりにはるか
高みにあったドラゴンの頭がぬつと降りてきた。間近で見る焦げ茶
色の瞳は意外に穏やかで、心臓が引きつりそうな恐怖がわずかに和
らぐ。

どちらにしろ、ここまで近づかれたら逃げる暇などないだろう。

諦め半分、興味半分で目の前の巨大な顔をじっと見てみると、ドラ
ゴンはやけに可愛らしいしぐさで首を傾げた。

「驚いた。君は、黒色かい。そんな珍しい仔が生まれたなんて話は
聞かなかっただけだな」

びつくりして、ぱくぱくと口を動かすが声にならない。信じられ
ないが、絶対にこのドラゴンが喋っていた。恐ろしく歯並びのいい
口が合わせて動いていたし、声もそこから聞こえてきた。

穏やかで呑気そうな声は若い男性の声に聞こえた。それがドラゴ
ンから、しかも日本語で聞こえてくるとというのが解せない気がする。
恐怖より興味が勝って、つい言葉が漏れた。

「ドラゴンって喋れるんだ。RPGみたい」

「……喋らずにどうやって意思疎通するんだい？ あーる……って何だ？」

訝しそくにだが、ドラゴンはちゃんと応えてくれた。どうやら言葉は正確に通じているようだ。いきなり喰われる心配もないらしいと分かってほっとした。

「RPGっていうのはロールプレイングゲームの略で、勇者が魔王やらドラゴンやらの大ボスを倒すのがだいたい最終目的な感じのゲームですよ。ゲームの中でなら、ドラゴンが喋るのも不思議じゃないんですけどねえ」

安堵したついでにぺらぺらと説明を加えてみたが、ドラゴンは首をひねるばかりだった。

「おかしいことを知ってる子どもだなあ。それは新しい発明か？ 君は大陸のほうから来たの？」

「出身は極東のちっちゃい島国ですけど、その大陸っていうのは……あー、ちょっと待ってください。首が痛くなってきた」

頭を仰向けて話しているのがつらくなって、首の後ろを手で揉みほぐす。すると、ドラゴンはたった今気が付いた、というように瞬いた。

「そうか、すまない。この姿では話しづらかったな」

そう言うなり、ドラゴンの姿が掻き消えた。今まで見えていたのが幻だったんじゃないかというほど、それはそれはあっけなく。

あまりの事態にまさかおかしいのは自分の頭なのでは……と不安に襲われていると、「こっちこっち」と緊張感のないドラゴンの声

がした。がさがさと藪の中から現れたのは、背の高い若い男。思わず素で訊いていた。

「どちら様ですか？」

「は？ さっきまで話してた相手を忘れたの？」

きょとんとして返された声は、確かに緑色のドラゴンと同じもの。

「……小さくもなれるんだ」

もはや諦めの境地で力なく呟く。

不可解そうに首を傾げる青年のしぐさは、ドラゴンと同じだった。

緑色がかった濃い銀色の髪は見たこともない不思議な色合いで、目を引いた。整った顔立ちは東洋風だが、焦げ茶の瞳は日本人とは比べ物にならないほど明るく澄んでいる。簡素なシャツとベストとチノパンぽい服装だけでは、なに人なのかわからない。

この青年がさっきまでドラゴンの姿をしていただなんて、まったく正気の沙汰ではないと思うのだけれど。

「変化も知らないなんて、変な子だなあ。龍ならどんな親でも教えることなのに。見たところ尻尾も牙もないし、眼も銀色じゃないし。君は龍だよな？」

ものすごくおかしいことを聞かれた。とっさに反応を返せないほど驚く。

「……いやいや、まさか。私はただの人間ですよ」

まったく、とんだジョークのセンスだな、と思っていると。

「ニンゲン？ ニンゲンって何だ？」
「はあ？」

その反応こそなんなんだ、と相手をじっと見るが、「冗談を言っている風では全くない。

つまり何か。このドラゴンさん、いや自分で龍って言うてるから龍さん？ の知る限り「人間」なる者はいない。つまりここは、人間の存在しない異世界だとしても？

……。

特撮物の怪獣よろしくでっかい生き物が現れた時から嫌な予感を感じていたけれど。幸か不幸か、どうやら定期試験の心配をしている場合ではなくなったらしい。

いや絶対、幸ではないけど。

これはおかしいことになった。と、ここではじめて真剣に考えた。とりあえず、まずは確認せねばなるまい、と真顔で両頬をつねってみる。青年は目をぱくりさせた。まあ、気持ちはわかる。

けっこうな力を込めてみたが、痛いだけで目が覚めることはない。

結論。

「これは現実で、私は人間が存在しない代わりに龍は存在するへんてこな異世界にいる」

口に出してみると、こんなバカな話があるか、という気分になった。苛立ちそのままに青年を見た。

「ここはどこ？ 国とか地域とか、名前はあある？」

青年は戸惑った風だったが、すぐに答えてくれた。

「ここはシルウア島の東、緑龍の村の近くの森だ。島は龍族の王が治める龍の国の配下にある。国の名はない」

「さっき大陸がどうか言ってたけど、大陸の名前は？」

「俺は知らないな。もしかしたらあるのかもしれないけど、大陸は一つきりだから『大陸』と呼ぶだけで用は足りてる」

やはり、夏妃の知る世界とは違う。無駄なことだと知りながら、手にした教科書の最初のページを開いて彼に見せた。

「この世界に、この地図と似たところはある？」

細かく国名が書き込まれた世界地図をもの珍しそうに覗き込んで、しかし青年は首を振った。

「いや、こんな形の島も大陸も見ることがない。ここに書き込んである模様は文字なのか？これも見たことがないよ」

決定的だった。教科書を閉じて、だらりと手を下ろした。混乱を乗り越えて、やけに冷めた頭で考える。なぜ、こんなことになったのだろう。

半ばやけ気味に、青年を睨むように見て訊ねた。

「貴方から見て、私はどう見えます？」

青年はあっさりと、けれど真摯な口調で答えてくれた。

「ニンゲンとやらは知らないが、俺には君は龍に見えるよ」

まったく、何の冗談なのだか。ファンタジーな生き物にお仲間認定される日が来てしまうとは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0980z/>

希少保護生物指定女子。

2011年12月3日21時52分発行